



裸一貫たたき上げ！ 「少年はせひろし物語」

■わし養子に行くちゃ！

まだ小学2年生のあどけない男の子が人生の大きな転機を迎えようとしていた。父母は苦悩の表情を浮かべていた。たまりかねたように母親が言った。

「浩、どっちでもいいげんぞ…養子が嫌なら行かんでもいいげんぞ！」

だが、少年はなぜか目をキラキラと輝かせ、叫んだ。

「わし行くちゃ！養子に行くちゃ！」

あとから思えば、この瞬間、富山生まれの少年が金沢の代議士になる道を自分自身で選び取ったのである。



ことわざで「小糠(こぬか)三合あつたら養子に行くな」と言うのに、なぜ浩少年は喜び勇んで養子に行くのだろうか？

浩は昭和36年5月5日、こどもの日、端午の節句に富山県小矢部市興法寺町の農家の三男坊として誕生した。

浩という名は前年お生まれになった浩宮さま(現皇太子殿下)にあやかって付けられた。当時の皇太子ご成婚、ミッチーブームはものすごく、小学校の同期に4、5人の浩君がいた。

高貴なのは名前だけの浩少年は田舎育ちの腕白坊主で、野山を駆け回り、川で泳ぎ、田んぼを突っ切って小学校に通う毎日だった。吉幾三の「バスは1日1度来る」ではないが、路線バスは1日2回という山あいの農村で、そこには信号機さえなかった。

生家はお世辞にも豊かとは言えなかった。父は農業のかたわら、内職に金沢金箔の箔打ちをしたり、村の瓦工場で働いたりして生計を立てていた。



小学生のころ富山県小矢部の実家で

■太陽に向かうヒマワリのような性格

そんな浩少年に養子の話が持ち上がったのは小学校に上がって間もないころだった。親戚である金沢の馳家から跡取りにと望まれたのである。

浩少年はおさな心に考えた。

「このまま家におってもパツとせんなあ…。あんちゃん二人おるし、家はもちろん、田んぼも分けてもらえんやろ。学校もどこまで行かせてもらえるか…」

ずいぶんませているようだが、末っ子の浩少年は早くから真剣に一家の生活を心配し、将来の人生設計を考えていた。

「馳の家にいけば跡取りや。小さいけど家もある。リンゴ畑もわしのもんや！」

浩少年にはそれが大きなチャンスに思えた。そして決めた。

決心の早さが、この子の持って生まれた性分であった。太陽に向かって咲くヒマワリのように、どこまでも明るく前向きであった。なかなかの野心家だったが、その子どもらしい野心を隠そうともしない開けっぴろげなところが持ち味でもあった。

いよいよ養子に行くという朝も、無邪気にバットを振り回す8歳の浩少年。その姿を見つめる実母の目に涙が光っていた。

＊

「跡取りになれる」と言っても、浩少年が養子に入った金沢の馳家も裕福ではない。果樹園とは名ばかりで、30本ほどの苗木を育てて直売するリンゴ屋さんだった。

父はハンコ彫りの内職をし、母は専売公社に勤めていた。生家と同じ兼業農家だが、違うのはここでは浩少年が1人息子で子供とはいえ貴重な労働力だったことだ。



養子入りの朝、ガラス越しに実母の姿



小学校のころから、浩少年は学校が終わるとリンゴ畑を手伝った。草取り、消毒、せん定、そして収穫。養父に習って作業することはつらくもあり、また楽しくもあった。とったリンゴを天びん棒に付けてバランスを取り、畑からふもとの家まで坂道を下る。重労働だが、それも鍛錬となり、知らず知らずたくましい体がつくられていった。

■わしが学校立て直す！

次の転機が中学校2年生の時に訪れた。そのころの浩少年は国語の先生にアコがれて、自分も教員になろうかと夢見る一方、途絶えていた相撲部を復活させて格闘家の素質を見せたところだった。

ところが、その時、大事件が起きた。学校が焼けたのである。受験を苦しめた3年生の放火であった。伝統ある鳴和中学校の校舎が無惨に焼失した。浩少年のほほを涙が伝った。むしように悔しかった。しかし、放火した先輩を恨んで泣いたのではなかった。

「そりゃ学校に火を付けたもんは悪い。そやけど、何でそこまでしたんや？勉強、勉強、受験、受験、しんどくて破れかぶれになったんか……」

浩は珍しく考え込んだ。

「だいたい何のための学校や？受験勉強のためだけか？もっと大事な何か、あるはずや！」

もっと大事な何か—今なら「生きる力」とでも言うのだろうか。だが、浩少年はそんな言葉は知らない。

それに長々と考え込むのは性に合わない。何でもいから、まず行動だ。

「よし！わしが学校を立て直す」

もちろん校舎再建のことではない。先生も生徒も落ち込んだ学校のムードを立て直そうと思ったのだ。そして、みずから宣言した。

「わし生徒会長に立候補する！」

その公約がまた変わっていた。

「僕が生徒会長になったら、毎朝、一番に登校して学校中を掃除します！」



鳴和中生徒会長として浅野川中と交流

よく分からないが、やたらと熱い浩の気迫に圧倒されて投票する生徒が多かった。予想を裏切り、人生初当選。その日から毎朝、全校の廊下をぞうきんがけした。真冬もはだしであった。はだしのほうが気合いが入るのだ。

「変わったやっちゃ」「ダラでないか」

あきれたり、冷たい目で見ると見る者もいたが、だれがどう言おうと気にしない。焼け残りのすすだらけの校舎を磨くことは自分の心を磨くことでもあった。

学校行事もやる気満々、先頭に立って引っ張る生徒会長・浩の姿を見て、変人扱いしていた同級生も次第に一目置くようになった。

「みなさーん、元気ですか！」

浩の明るい大声が沈んだ学校に元気を吹き込んだ。



鳴和中の運動会であいさつ

■お前は総理になる！？

国語が得意で話し好きの浩少年は中学2年、3年と連続して「私の主張」コンクールで校内1位となり、中3の時には金沢市で優勝を飾った。テーマは「将来の仕事」である。

「僕は運動選手になって海外に試合に行きたい！スポーツ推薦を受けて、ただで大学に行きたい！そして好きな国語の先生になりたい！休みの日は家のリンゴ栽培を近代化してお金を稼ぎ、両親を楽にさせたい！」

その時の審査員の言葉が記憶に残る。

「いい夢だね。でも君は将来、別の仕事でとんでもない大物になる気がするな……」

その仕事は何であるか、浩にはまだ分からなかったが、なんとなく血が騒いだことは事実だ。



そして、もう1人、予言者がいた。浩が進学した星稜高校の野球部を率い、甲子園で準優勝まで遂げた山下智茂監督である。監督は浩を野球部にスカウトした。

「いい体しとる。キャッチャーに向いとるな。どうや、甲子園に行かんか！」

浩はレスリング部を選んだが、山下監督は目をかけ続けた。社会科の教諭でもある山下監督は、浩たちに政治経済を教えながら、こう言った。

「馳、お前は将来、総理大臣になる男や！」

「そんなバカな」と思ったが、初めて政治家を意識したのは、この時だったかもしれない。なぜ、山下監督はそんなことを言ったのか、後で聞いても監督は「なぜって。おれはそう思ったんだよ」と笑うばかりだが。



星稜時代の浩は夢に向かって突っ走る。3年間、レスリングに明け暮れながら、校内模試で1位になったことも。高3の昭和54年8月16日、星稜野球部が夏の甲子園で強敵・箕島と延長18回の死闘を展開した時、浩はレスリング部合宿でテレビ観戦して発憤した。

浩はその10月、見事に宮崎国体で優勝を果たし、最初の夢をかなえたのである。

国体優勝の結果、選抜されてアメリカ遠征にも行けた。ちょうどソ連軍がアフガニスタンに侵攻したときで、ホームステイ先のおばさんが新聞を見せて、ソ連に対する怒りをぶちまけた。英語はほとんど分からなくても、東西冷戦の厳しい現実が肌身で感じられた。アメリカはモスクワ五輪をボイコットし、その4年後にはソ連がロサンゼルス五輪をボイコットしたのである。



星稜高校時代、国体出場



■願えばかなう何事も！

昭和55年、専修大文学部国文学科にスポーツ推薦で入学。かねての希望通り、入学金、授業料免除である。

厳しい体育寮に入り、6畳間に6人の生活は今時の刑務所などよりよっぽど窮屈だったが、浩はその中で先輩後輩のおきてを学び、兄弟同然の同期のちぎりを結んだ。

レスリングは、コーチの松浪健四郎教授(元衆議院議員)の指導でめきめき力をつけ、大学2年でジュニアチャンピオン、4年で学生チャンピオン。全日本選手権だけは2位が続いたが、卒業後の昭和59年5月5日、奇しくも誕生日に初めて優勝してロサンゼルス五輪出場を決めたのである。

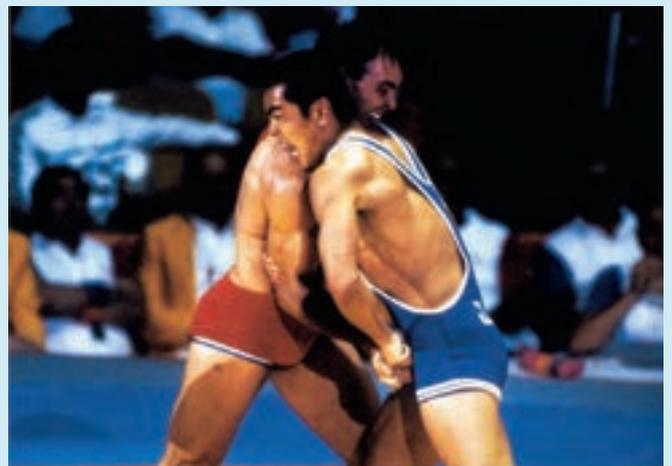


文武両道の「文」のほうでは「源氏物語」や「古今和歌集」を読み解く毎日であった。学生ながら日本文学風土学会の会員となり、京都、奈良をはじめ全国の文学、史跡を巡り、完成させた卒業論文は高い評価を受けた。卒業後、母校星稜高校の教壇に立ち、国語の先生になるという夢もかなえたのである。



浩は大学4年間、ありとあらゆるアルバイトをした。家庭教師はもちろん、地下鉄の資材運び、倉庫の組み立てなど建設現場でもよく働いた。お好み焼きの店員や映画のエキストラもやった。レスリングの強化合宿費や海外遠征費はみな自力で稼いだのだが、それ以上の財産となったのは、様々な職種で働く人たちの気持ちが分かったことだ。

「若いうちの苦労は買ってでもせよ」という。馳浩、大いなる人生の船出であった。



専修大時代、ロサンゼルス五輪で奮戦



母校星稜高校で国語教師に



少年の生き立ちを駆け足でつづってきた。この少年・馳浩が後に政治家となり、参議院議員、衆議院議員として、文部科学副大臣、自民党文部科学部会長などを歴任してきたことはご承知の通りである。レスリングを通して世界各国を見たことも政界に入った理由の一つだ。その中には北朝鮮も含まれている。母校の教壇に立って日本の教育はいかにあるべきか考えたこともきっかけとなったろう。



政治家転身のきっかけのひとつは北朝鮮訪問

大人になってから、特に政界に入ってから馳浩の活動ぶりについては今さら語るまでもない。

ここに記したかったのは、必ずしも恵まれない境遇に育ちながら明るく前向きに自分の人生を切り開いてきた少年の物語である。親から地位や財産を受け継ぐ者は幸せだが、馳浩はそうではなかった。裸一貫たたき上げの半生を経てきたからこそ、人の痛みや苦しみが分かるのだ。

これからも幾多の試練を乗り越えて、馳浩はふるさとのため日本のため力強く政治の道を歩み続けることだろう。



多くの支持者と選挙を闘う



政治とカネの問題で民主党を追及



南極観測船「しらせ」出航式典 文部科学副大臣として出席



輪島の千枚田で田植えをする



国会見学の中学生たちと



子宝を授かる



専修大学レスリング部監督として後輩を指導する



センバツ高校野球大会の始球式で甲子園の土を踏む